

八月十日

昨日は大学の通信機能、その他一切切ストップしたので休んだ。夕方、烏山宗柳で若松氏と打合わせ。諸々のアドバイスを受ける。

今朝の朝日、毎日の論評、又、世論調査は大方、小泉支持に傾いた趣あり。ゆつくりと全部読んだ。小泉首相という人物は劇場国家化している日本の現実を直観で把握している才がある様だ。参院での郵政民営化法案否決、即日解散、反対勢力の公認拒否、記者会見での「国会は否としたが、国民の信を問いたい」発言。一連の動きが劇場の如くに場面を変え、登場人物を代え、変転していった。第一幕の幕切れは八日夜の記者会見だった。ここでの小泉首相の演技力は真に迫り、否決された敗者としての立場を一気に逆転してしまった。国会ではなく、直接国民に聞いてみたいのだと言い切つて。今日発表の内閣支持率は再上昇。解散への支持も高い。参院での法案否決のドラマが、国民の登場というスペクタクルに置き換えられ、全く異なるドラマに組み換えられてしまった。この筋書きがあらかじめ想定されていたとは思えないが、明らかに計算ずみの、シミュレーションされたものであったのも、今になっては良く解る。自民公明で過半数を取れなければ退陣するとの公言は、新種の公約でもある。

亀井、綿貫等反対勢力にはこの類のアンテナが無い。それ故に劇場国家のメイנסテージに上がる事が出来なくなっている現実がある。この現実には単にポピュリズムと切つて捨てられぬ歴史

の動きがあるような気がする。この政変がどのように展開してゆくのかは知らぬが、第一幕は小泉首相にアドバンテージの幕開きだった。十一時、世田谷村の小さな椅子の撮影にカメラマン、来る。

十五時研究室。十七時半、電通、佐藤論氏と北京プロジェクト打合わせ。十九時前迄。新大久保近江屋で打合わせ続行。二十二時前迄。世田谷村への帰途に着く。チャンスには当然同程度のリスクがつきまとう。しかしながら対面している北京のプロジェクトはそれが最大限に我身に襲来しているのを実感する。この間の事情は、秋に再開される予定の、山本伊吾編集長の「室内」に公開する予定だ。

八月十一日

八時半世田谷村を発つ。午前中杏林病院定期検診。体調は良くない気がするが、検査の数値その他は概ね良しとの事。気持と身体は不即不離の筈だが、変だな。

病院に居ると周りは皆老人ばかりで、しかも身体にながしかの不安を持つ人たちのだらうから、空間は決して生気に満ちてはいない。有体に言えば、日没寸前、たそがれの空気がどんよりと漂っている。それが身体に侵入してくると、少々気も滅入るのだ。

十二時前病院の六階で昼食。突然、銅版画に取り組んでみるかと思いつく。

八月十二日

十時十五分研究室の邸打合わせ。